

---

# 初恋

うさぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初恋

### 【Nコード】

N1339K

### 【作者名】

しんぎ

### 【あらすじ】

16歳の春、初恋に逢う。

ちいの初恋の相手はセンサーで!???

あたし

あたし？

沢井ちひろ

歳？

16歳

彼氏？

いない、みたいな

好きな人？

いない的な

好きなタイプ？

それ聞いちゃう？みたいな

成績？

下から6番目、みたいな

頭なんてよくなかったって生きていけるし、的な

そんなあたしも今日から恋愛探します、みたいな

『ちい〜どーしょー』

この仔???

笹川 梓 親友、みたいな

そんでもって幼馴染、みたいな関係

『あずらしくないナリ〜どうしたナリ〜?』

語尾にナリをつけるこいつは私の友達の舞。苗字は知らない、み  
いなw

『今日、テストぢゃ〜ん?ヤバイんだよお〜><』

『あずは成績優秀だからヤバイことはないナリ〜 どちらかとい  
うとちいがやばそうなり』

あたし、反論する前に栄養源となるイチゴミルクを堪能中。。。。

『ちい〜><ジューズなんかのんきに飲んでないでなんとかしなき  
ゃ〜><』

そこに、新しく赴任してきた若い男のセンサー登場

『ほーら、みんな席に着け〜。沢井、いちごみるく没収するぞー』

『だめなのら〜』

あたしの必死な抵抗。

・・・のはずが、いちごみるくの甘さにおっとり口調で喋る始末

はあくあ・・・。

## 憂鬱な雨

今日も雨、みたいな

んで、自転車で登校。

あほらしい、みたいな

とりあえず教室まで急ぐ、みたいな

『ちい〜おっはお〜』

『おはよう。あれ？舞は？』

『今日は休むって〜』

『ふーん……。』

『あれ？ちい、今日はイチゴミルクじゃないんだ〜』

『え？』

私の手に持たれたそれは……。バナナジュース……

『あっ！！』

『あーあ……。やつちやったねー』

『あたしの栄養源がああああああ！！』

『まあまあ。授業始まるから席行こう』

『うん・・・』

授業が始まる前にセンサーは言う。

『今日は新しい仲間を紹介しよう』

どうせ転校生・・・よくあること・・・

『おはようございます・・・』

入ってきたのは顔立ちも綺麗で声もかわいい女の子だった

『じゃあ・・・黒板に名前書いて挨拶して』

『はい。』

その子は綺麗な字で見やすく丁寧に【華園 里恵】と書いた。  
書き終わると、彼女は、

『よろしくお願いします。』・・・といった

『はい、じゃあ、空いてる席に座ろうか』

『はい。』

その子が来た席は・・・

私の隣だった。

## イジメ

新しくやってきた華園さんと仲良くしようと思んな一生懸命だった。

でも、わたしはしなかった、みたいな

だって、めんどくさいし、転校してきただけでちやほやされて、鼻持ちならないから

私はその日、華園さんに嫌がらせをした

梓と舞は止めたけど、私はやってしまった。

華園さんにしたこと・・・

それは、華園さんにシカトすることだった。

ある日、華園さんは、教科書を忘れてきた。

ばかじゃん、と内心思ったけど、あえて言わなかった。

だって言ったらシカトにならないから。

華園さんは『教科書みせて?』と言って来る。

無視無視。ここには私しかいないの。華園なんて奴いるわけない。

結局見せないで授業は終わった。

それから華園さんは私に敵意をむき出しにするようになった。

そして……

翌日登校して教室に入ると、黒板に大きく、赤いチョークで、

沢井ちひろは死んだ。

ご愁傷様です。

と書かれてあった。

机には、菊の花。

(なにこれ……?)

そして、私は華園さんに聞いた。

『ねえ……どうしてあんな事するのよ?』

『は?意味わかんない。』

『ちょっといい加減にしてよ……。菊の花はなんなのよ?』

すると、華園さんは、いきなり、ついてきて。とだけ言うと屋上へと向かって走り出す。

『そっちは屋上……』

『いいから早く』

屋上のドアを開けると、フェンスのないところまで私は連れて行かれた。

まさか……

おそかった。

わたしはもう空を飛んでいた。

いや……正確には頭から落ちていった。

落ちる瞬間、華園さんの悪魔のような微笑みが目にうつった。

これで、終わりなんだとはっきりとわかった……

## ゴースト

気が付いたら病院のベッドのうえだった。

でもわからない。

自分が誰で、ここがどこで、どうして寝そべっているのか

そこに、学校のセンサーという人が来た。

『そんなっ……。』

それだけ言うと、涙を流し始めた。

誰なのかもわからない人に泣かれても嬉しくなんかない。

あれ？そっぴやなんであたし宙についてんの？

しかも寝てるあたしは……

顔面は残念なことになって、頭は血だらけ。

しかも着てる服は白装束。

あたし……死んじゃったの……？

そうか。

あの時、華園さんに突き落とされて……

この人はわたしの好き（・・・かどうかはわかんないけど）な人で  
センセイだ。

そうか。すべて思い出した。

私は・・・

死んじゃったんだ・・・。

## 声を返して

私は、改めて自己分析し始めた。

私は、あのセンセイが好きなんだ。

だから、いちいちドキドキ・・・してなかったけど、気になって成仏もできないでいるんだ。

じゃあ、どうしたらいい？

告っちゃおう？

でもどうやって？

声をだせばいい

声もでない幽体なのに？

じゃあ手紙だ

シャーペンなんかもてるわけない

じゃあ・・・

誰かのカラダを借りるしかない・・・

そうしようー！！

じゃあ誰の体を借りる？

とりあえず、学校まで飛んでみようかな・

私は学校までとんだ。

(んー・・・誰がいいかな？・・・)

梓じゃだめ。舞じゃだめ。

じゃあ・・・

あいつでいいや。

華園さんだった。

もう適当。

どうなったっていい。

(はやいところ成仏しないと・・・)

わたしはすぐ、華園さんに入り込むと、休み時間、あのセンセイに声をかけた。

『あ・・・あのー!!』

『ん???ああ、華園・・・なんだ?』

『私、センセイが好きでしたー!!』

『ああ、んじゃ、今は違うんだね、そっか^^ありがとう』

(し・・・しまった!!これじゃあ過去形じゃん!!しかもこれじゃこいつがセンセイの事好きみたいじゃん!!)

とりあえず、華園さんの体から出て、センセイを追った。

(あ!!いいこと考えた!!)

そう。それはセンセイのカラダに入って手紙を書かせる。私は死んだ沢井です。成仏したいからセンセイにいます。好きです。ってね  
で、入ってみると、センセイのカラダを借りてすべてを書いた。

一度出てみると、センセイは、怖がった。

失敗。

でも伝えた。

これですつきり。ちゃんと成仏・・・

あれ・・・?天からの光は・・・?

お迎えの人たちは?

そうか。まだ遣り残しているのか。

となるとあれだ。

言いたい事を言わなきゃいけないんだ。

その夜、華園さん宅にいくと、勉強している華園さん発見。

華園さんに向かってわかってわかるように窓をガラリといきなり開けてカーテンをはためかせた。

華園さんはビクつく。

『だれ・・・？』

わたし・・・？

『その声・・・』

え・・・？聞こえてるの???

『当たり前でしょ。用件は?』

声、返してよ。

『え・・・？』

わたしは、華園さんのカラダに入り込んで、言う。

『声、返してくれてありがとう。じゃあ、カラダ、返してくれる・・・?』

わたしは、その夜、華園さんを連れて天空に登った。

でも、おかしい。

川を渡れない。

渡し人に聞いてみると、『好きだった奴がわからないんじゃ、だめだな。もう一度行ってこい。』

・・・という。

そんなのって・・・アリですかあああああ??????????

## 思いを伝えるに

さてさて、下界に降りるとターゲット発見。

そうかー！

もしかしたら……。

その日、授業中、うたた寝している舞に耳元でささやいた。

『沢井ちひろから伝言だって、センセイに伝えて。大好きだったって。今も大好きだって。』

舞は、うん……。と答えてくれた。

で、授業も終わり、休みになると、舞はセンセイのところにいく。

舞は、手紙を差し出す。

ちいからです……。とだけ伝えて。

そういえば、舞は私の字にそっくりだった。

これで、いいんだ。

すると、センセイは泣き出した。

すべてを知ったという感じで。





『ちい~~~~おきなちーい!~!』

『んー.....あとまっしー.....』

『E  
O』

## 思いを伝える(後書き)

読んでくださってありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1339k/>

---

初恋

2010年10月10日03時13分発行